

G. ク ラ ッ プ 小 論 (その一)

宇 佐 美 道 雄

外 国 語 教 室
(1970年9月4日受記)

A Short Paper on G. Crabbe (Part 1)

Michio USAMI

Department of Foreign Languages
(Received September 4, 1970)

The author has been interested in the relationship between literature and its environment. And it is the main subject of the paper to discuss Crabbe's work as one of those signs in the field of literature which indicates the vast change in English society from 18th century to 19th. In this part of the paper, Crabbe's realism and his mode of expression are examined chiefly from the point of view that they follow the tradition of 18th century literature. The analysis of 19th century aspect of Crabbe's poetry will be left to the next issue.

§1. G.クラップ (1754~1832) の詩を読む人は今は少なく、まれに読む人もそれを冗漫として退けることが多いが、クラップは日本人の語学力にも読みやすく、韻文のストーリーを原典で楽しむ快感に捨てがたいものがある。クラップは膨大な量の詩行を残したが、その大部分は同じ詩型で小さな話をいくつも集める物語詩の形をとった。

18世紀末の庶民生活を題材にしたこれらリアルな物語詩に、同じ時代の特異な画家ホガースの物語絵を連想するのは、あながちわたしばかりでもあるまいと思う¹。庶民性、日常性、物語性、教訓主義、諷刺、ユーモアと、両者の共通点を並べることはさておき、クラップが倦むことなく書いた物語詩と、ホガースが独得の画風で描いた版画や油絵のあいだに、それぞれの芸術が持つ迫真力を通して、はっきりした共通の土壌のあることを実感するのは、少なくともわたしにとって、ひとつの発見の喜びとなる。

詩も絵画も社会的現象の一環をなす。社会は一個の有機体として、絶えずゆっくりと流動するが、歴史に残されたあらゆる人間の営みは、その時代のその社会をのぞき見させる窓の役割りを果たす。18世紀の後半から19世紀の初めにかけてイギリスに起った大きな社会的変動を背景として、G.クラップの作品を考えることが、この小

論の中でわたしの試みたことにほかならない。

§2. 「クラップはなにもかも韻文にひっつけてしまう」、「クラップは醜いものを描く——彼の描写は模写だからほんとうだけれども、それだからこそ醜い」²という批難がある。クラップはサフォークの漁村に生い立ち、レスダジャ、サフォーク、ウィルトシヤの各地で教区牧師として一生を終えたから、詩の題材はすべて田舎の教区民の日常生活から得られた。クラップは地方の自然を背景として、老若、男女、貧富のあらゆる生態、とくにその愚かしさと醜さを描く。だがそれを詩にとって望ましいと考えるか、望ましくないと考えるかには無関係に、クラップの詩にはそれが書かれた時代特有の意味があったのであり、それを少しでもありのままに捉えておくことは、作品の正しい理解への一助となる。

1807年の詩集で初めて公にされた『教区の記録』の冒頭で、クラップは次のように歌う。

The year revolves, and I again explore
The simple annals of my parish poor;
What infant-members in my flock appear,
What pairs I bless'd in the departed year;
And who, of old or young, or nymphs or swains,
Are lost to life, its pleasures and its pains.

1 R. Huchon が *George Crabbe and his Times*, London, 1907 の中で両者の類似性を指摘している。

2 "Whatever is, Crabbe hitches into rhyme," "Crabbe describes ugly things; his descriptions are true because they are facsimiles: because they are facsimiles they are ugly." W. Hazlitt: *The Spirit of the Age*, London, 1825.

And clasping tares cling round the sickly blade.

(*The Village*, I)

(見よ、そこには枯れた草むらの生い茂るヒースの荒野があって、近くの貧しい人びとに燃料の泥炭を与えている。そこから長い焼けるような砂地が見え、そこではやせた作物がしおれた穂をなびかせる。いくら手入れをしてもはびこる一面の雑草が病害を受けたライ麦を弱らせる。あざみがとげのある腕を遠くのぼし、ぼろをまとった幼児を傷つけそうである。けしの実は風にうなずきながら、労苦の希望をあざけり、むらさき草は不毛の土地をいろどる。麦束の上に、強く高く頭を出すぜにおおいが、柔い葉をなびかせ、からしなが若芽の上に影を投げ、からすのえんどうが枯れ葉のまわりにからみつく。)

こうして雑草の荒野を科学者の細密さで描く筆致に、しばしばクラップの真価がうかがわれることは、争われない事実と思われる。一方クラップの写実的描写は、住居とか風景とか、ものの世界ばかりではなくて、人間そのものから、さらにはその心の奥底にまで及ぶ。墮落しきって、いまは救貧院にいる男の昔の醜い慾望を、クラップは次のようにえぐり出す。

Beauty alone has for the vulgar charms,
He wanted beauty trembling with alarms:
His was no more a youthful dream of joy,
The wretch desired to ruin and destroy;
He bought indulgence with a boundless price,
Most pleased when decency bow'd down to vice,
When a fair dame her husband's honour sold,
And a frail countess play'd for Blaney's gold.

(*The Borough*, XIV)

(この卑しい男は美女にのみ心ひかれ、美しい女の恐れおののく様を好んだ。若者らしい喜びの夢を持つことはもはやなく、この醜い男は墮落と破滅を見ることのみ求めた。金銭に糸目をつけず放とうをあがない、清らかな心が悪徳に屈するとき、またうるわしい婦人がその夫の名誉を売るとき、さらには誘惑に陥り易い

貴婦人が、ブレイニーの金を目当てに賭けごとをするとき、ことのほか満足をおぼえた。)

人間のけがらわしさを、ここまであからさまに書いた詩人も少なくなろう。そこで以上の引用例に見られるクラップの描写の特徴を、経験主義、即物主義、細部主義、客観主義というように整理することは可能かと思われるが、要するにこれは、描写における科学者の態度ということになるのではあるまいか。

詩人の息子が伝えるところによれば、「父は絵画や音楽や建築や、画家の目に美しい風景とうつるものには、まるで愛好心がなかった。しかし父は科学——第一に人間の心の科学——にたいして、次に自然一般への科学、さらに抽象的な数量への科学に情熱をもった」⁵⁾という。また O. シグワースは「クラップは生涯にわたって植物学と昆虫学に関心を持ち、晩年には化石に熱中した。…彼はサフォークで既に知られていた植物に40種をつけ加えるほどの植物学者であった。1795年『レスター州の歴史と古事』と『ベルヴァー峡谷の自然史』を執筆した。」⁶⁾という。こうしてみると、クラップは若いころに医術を習得しようとして始めた科学——とくに植物学——の研究を、一生やめなかったことになるが、その詩に見られる描写力の特徴は、たしかにこの事実と関係している。クラップが詩を書く態度には科学者が自然現象を記述する態度と共通するものがある。

要するにクラップは、自然にたいして科学者となり、人間にたいして詩人となり、そこになんの異和も見なかった。一個人の中での詩と科学の同居は、現代においては奇異にも感じられるが、そこにはクラップが生きた時代の自然と人間の関係を考慮に入れることによって理解し得るような要因もあった。B.ウィレーが「17世紀には真理がキー・ワードであったのにたいして、18世紀には自然がキー・ワードとなる」⁷⁾といったその意味において、18世紀はやはり基本線において自然を追求した時代であり、詩と科学は他の文化体系とともに、「自然」の研究という点で未分化の状態にあった。クラップの風変わりな描写力は、啓蒙期の自然研究が進展した間のひとつの発展段階を示している。クラップと前後して E. ダ

5 "My father had no real love for painting, or music, or architecture, or for what a painter's eye considers as the beauties of landscape. But he had a passion for science—the science of the human mind, first;—then, that of nature in general; and, lastly, that of abstract quantities." G. Crabbe (son): *The Life of George Crabbe*, London, 1947.

6 "He had a lifelong interest in botany and entomology, and, in his later years, was fascinated by fossils... he was enough of a botanist to have added some forty species of plants to those known in Suffolk. In 1795 he wrote *The Natural History of the Vale of Belvoir in The History and Antiquities of the County of Leicester*," O. Sigworth: *Nature's Sternest Painter*, University of Arizona, 1965.

7 "Whereas for the seventeenth century 'Truth' seemed to be the keyword, this time [eighteenth century] it is 'Nature'." B. Willey: *The Eighteenth Century Background*, London, 1950.

ーウィングが、同じ詩型を用いて自然科学詩『植物園』を書いたが、こうした文化的土壌を背景としてクラップの詩を読むとき、その描写が持つ歴史的な意味——当時の読者層にとっての古さ、新らしさ、親しみ易さなど——をたとえ部分的にでも再現できるのではあるまいか。

§3. クラップのリアリズムを支える一方の柱がその描写の仕方であるとすれば、もう一方の柱は主題の在り方ということになる。シグワースは「クラップの詩の主題は——ポープとジョーンソンの写実的諷刺詩の場合と同じく——人と風俗である。もっともロンドンの人と風俗ではなくて、オールドバラのそれではあるが。」⁸と考える。事実クラップは『教区の記録』の序文の中で「読者はここで田園の素朴とか、田舎の粗野とかいう観念から離れて、農民生活へのもっと自然な見方から村の風俗を描こうとする努力を、再びご覧になるでしょう」⁹と述べて、（ここで「再びご覧になる」の再びという意味は、前作『村』に続いている意味である）このあと「記録を繰りながら教区民の人情世態を歌う」というさきに引用した詩行に入る。そして田舎びとたちの出生と結婚と死亡にまつわるもろもろの話を物語る。

そのころの教区牧師は冠婚葬祭はもちろん、村のあらゆる出来事の相談にのり、またさまざまな秘密も信徒の告白を通して知ることができたから、クラップは人生に通暁する機会にめぐまれた。その上この詩人には人間へのあくことない好奇心があった。

Where crowds assembled I was sure to run,
Hear what was said, and mused on what was
done;
Attentive listening in the moving scene,

And often wondering what the men could mean.

(*Tales of the Hall*)

（人の群がるところへは必ず走って、みんなのいうことを聞き、することを見た。その場の騒がしさの中で注意深く耳を傾け、人びとの意中を推し測った。）

こうして詩人は「観念を排し」¹⁰、直接体験した事象だけをありのままに提示して、「読者の空想や想像よりは、平易な常識と冷静な判断」¹¹に訴えた。ここでクラップの詩における主題の特色は、第一に人情世態を描くこと、第二にそれが体験に立脚していること、第三に空想や観念にわずらはされないことの三点に要約できようが、これはクラップの詩が大ざっぱにいった小説的、あるいは散文的ということになるのではあるまいか。

『村』の出版以後20年以上にもわたる沈黙の時期に、クラップは文学上の工夫を試みては、原稿を火にくべたらしいが、その中には少なくとも3編の小説が含まれていた。詩人の息子の伝えるところでは、「わたしは父の三番目の小説の題名を忘れましたが、それが詩に出てくるとよく似た悲惨な部屋の描写から始まることと、母が韻文で書かれた場合より効果が落ちると率直に述べたとき、父が読むのを中止して、少し考えてから「おまえのいう通りだよ」といったことを覚えています。その結果はこれら小説の草稿をゆっくり調べて、いつものように火にくべました。小さいころには原稿の焼却が子供たちの楽しみでした」¹²という。こうしてみると、すでに詩人自身も自分の文学に適した表現形式として、ある程度は小説を考慮したことがわかる。J. オースティンがよく冗談に「できるものならクラップ夫人になりたい」¹³といった話は有名だが、R. L. ブレットのように「もしクラップを誰か他の文学者とくらべなければならないとしたら、同時代の詩人たちよりも、むしろ19世紀の小説家

8 "The subject of his verse was—as with the realistic-satiric poems of Pope and Johnson—men and manners, even though it was the men and manners not of London but of Auldborough." O. Sigworth: *Nature's Sternest Painter*.

9 "In *The Parish Register*, the reader will find an endeavour once more to describe village-manners, not by adopting the notion of pastoral simplicity or assuming ideas of rustic barbarity, but by more natural views of the peasantry," The Preface of *Poems*, 1807.

10 *ibid.*

11 "to the plain sense and sober judgement rather than to their fancy and imagination." The Preface of *The Tales*, 1812.

12 "I forget the title of my father's third novel; but I clearly remember that it opened with a description of a wretched room, similar to some that are presented in his poetry, and that, on my mother's telling him frankly that she thought the effect very inferior to that of the corresponding pieces in verse, he paused in his reading, and, after some reflection, said, 'Your remark is just.' The result was a leisurely examination of all these manuscript novels, and another of those grand incremations which, at an earlier period, had been sport to his children." G. Crabbe (son): *The Life of George Crabbe*.

13 "Jane Austen would sometimes say, in jest, that if she ever married at all she could fancy being Mrs Crabbe." F. Whitehead: *George Crabbe, Selections from his Poetry*, London, 1955.

たちを思い浮べる」¹⁴ のも、さして不自然ではないと思われる。いわばクラブは、18世紀小説の隆盛と19世紀小説の出現とのあいだを埋める仲立ちの役割りを果たした。

18世紀が「散文と理性の時代」¹⁵ であり、この世紀での市民社会の成立が、近代小説の勃興をもたらしたことは、もはや定説となったが¹⁶、1740年以降約30年間に見られた小説隆盛の裏には、たしかに社会的な必然があった。それはこの時期に著しく進展した地方の文化的向上、読者層の大衆化、商業主義の発達、ジャーナリズムの拡大等と密接にかかわっていた。物語の舞台は都会のサロンから解放されて、平凡な市民が主人公となり、日常的な出来事が題材に選ばれ、だれにもわかる平明な表現が採られた。散文形式が求められたのは、まさにこの意味においてであったが、文学作品としての平明さという点では、散文だけにその資格があったわけではない。文学の読者にとって、定型化された韻文の方が親しみ易いという面もあった。

「擬古典主義の批評家たちから認められることなく、もっぱら上流社会の黙認によって、英語による韻文物語の流れは18世紀のあいだ持続した。物語への愛着は根強く、……印刷物として現在残っているよりは、はるかに多くのものがそのころ確かに存在した。……これらはいわばフィエルディングの小説を詩にしたようなたくさんの写実的作品を生んだ……」¹⁷ という人もいるように、世間から低俗と見られる引け目はあっても、韻文によるストーリーは、18世紀英文学の底流として根強く流布していた。シグワースはそういう流れの中にあつたものとして、J. スウィフトの『バウシスとフィレモン』、J. ゲイの『トリヴィア』、M. プライアの韻文世間話などを挙げるが、そこに引用されるゲイの詩行は、日常の瑣事を臆面もなく詩に持ち込んだ点で、たしかにクラブの詩の先例となり得る。孫引きになるけれども例示すると、

When dirty waters from balconies drop
And dext'rous damsels twirl the sprinkling mop,

And cleanse the spatter'd sash, and scrub the
stairs;
Know Saturday's conclusive morn appears.

(*Trivia*, Book I)

(きたない水がバルコニーから落ちてきて、器用な女がしたたるモップを振り回し、はねのかかった窓を洗い、階段をみがくとき、やっと土曜日の朝が来たこと知れ。)

幾分おどけた調子の下に卑俗な細部に詩に描くやましさを隠されているのが感知されるが、ここからそのやましさを除去すれば、それはクラブの詩風の特徴にほぼ直結すると思われる。「すべてコミックな物語の場合には、少しペンをひねることによって、それを悲劇(あるいは感傷性)に変えることができる。すでに手もとにあった材料を加工することが、クラブに残された仕事であった」¹⁸ わけで、18世紀英文学に隠見する韻文物語の伝統の中からクラブの作品を眺めるとき、その歴史的意味の一面が浮び上ってくるのではないかと思われる。

§4. 田舎の町や村を舞台にして繰りひろげられる人間ドラマを、科学者のち密さと忠実さで韻文に歌うクラブのリアリズムは、ひとつには啓蒙期における自然研究の、もうひとつには市民社会成立期における小説興隆の、それぞれ流れに沿っていた点で18世紀思潮の一面面を表わしていた。そしてクラブがそれを表現するために用いた言葉——詩型、用語、韻律——も決して同じ流れからはずれてはいなかった。わずかの例外を除けば、クラブはその作品の大部分を書くのに、ヒロイック・カブレットしか用いなかった。それが擬古典派時代を風びした詩型の典型であったことは云うまでもない。この意味では、クラブの直接の師匠はやはりポーブであり、R. L. プレットも「クラブは変化に富んだ柔軟なカブレットの使い方をポーブから学んだ。とくに詩行の単調をやぶるために休止を移動させる技術と、リズムを自然の語調に近づける技術とをポーブから習得し

14 "If one had to compare Crabbe with other writers, one would think not so much of his fellow poets as of the novelists of the nineteenth century." R. L. Brett: *George Crabbe* (Writers and Their Work, no. 75)

15 M. アーノルドが18世紀を "the age of prose and reason" と呼んだ。

16 内多毅「18世紀における小説の確立と展開」(英米文学史講座第5巻) 研究社、昭和36年などを参照のこと。

17 "Without recognition from neo-classic criticism and only by sufferance of the respectable, the stream of English narrative verse continued during the eighteenth century. The love for story remained... Much more of it doubtless existed than has survived in print... they produced a number of realistic pieces, the poetic counterparts of Fielding novels..." J. W. Draper: *Metrical Tale in XVIII century England*, PMLA, XLII (1937).

18 "As with all comic tales, a twist of the pen could have changed it into tragedy (or perhaps sentimentality), and this was the turn which it remained for Crabbe to give material which was already at hand." O. Sigworth: *Nature's Sternest Painter*.

た」¹⁹と述べている。クラブの習作『酩酊』の冒頭を『ダンシアッド』のそれと並べると、前者の後にたいする恭順は、一目瞭然となる。

The mighty spirirt, and its power which stains
The bloodless cheek and vivifies the brains,
I sing.

(*Inebriety*)

(力強い酒精、血の気のない頬を染め、頭脳に活気を与えるその力を、わたしは歌う。)

The mighty mother, and her Son, who brings
The Smithfield Muses to the ear of Kings,
I sing.

(*Dunciad*)

(力強い母とその息子、王侯の耳にスミスフィールドの詩神の声を聞かせるものを、わたしは歌う。)

このようにしてドライデンやポーブの詩行を手本にしてそれに変化を与え、その技巧のたくみさを競うことは、18世紀イギリス詩壇の一種の習わしであったから、クラブの用語や配語が、詩型と同様オーガスタンの伝統に深く結び付いていたことは論をまたない。先に引用した『教区の記録』の最初の数行に現われた“nymphs and swains”のような古典派の慣用語、また出生、結婚、死亡をそれぞれ“what infant-member in my flock appear,/What pairs I bless'd in the departed year;/And who, of old or young, or nymph or swains,/Are lost to life, its pleasures and its pains.”とまわりくどく表現する常とう的云いまわしは、クラブの語法の由来を示している。ポーブの使徒たちが羊を“wooly breed”と呼び、蛙を“loquacious race”, 小鳥を“feathered people”と呼んだことは詩的語法の典型として知られるが、

Big as his butt, and, for the self-same use,
To take in stores of strong fermenting Juice.

(*The Parish Register, II*)

(酒だるのような大男で、その大きいわけも同じく、血を沸かせる強い液汁をたっぷり中におさめるため。)

ここの「血を沸かせる強い液汁」で「酒」を意味する常とう語法が、この場合のように直喩と一体となって、現代の読者の興味をもひくに足るユーモアを生むこともあ

った。そのほか『教区の記録』冒頭の引用箇所にも、多かれ少なかれうかがうことのできる詩人常用の古典的手法——

He fish'd by water and he filch'd by land:
(*The Borough, XXII*)
(彼は海で魚とり、陸でものとりをした。)

The start of terror and the groan of fear;
(*ibid.*)
(恐慄の驚き、恐怖の呻き。)

のような意味と音韻とからみ合った対照法、

Pinn'd, beaten, cold, pinch'd, threatened, and
abused—
(*ibid.*)

(しばられ、打たれ、冷え、縮み、おどされ、罵られ—)

Ever the truest, gentlest, fairest, best—
(*Tales in Verse*)
(世にも正しく、おだやかで、美しく、すばらしい—)

こうした打ちつけるような連辞省略、

But kept her farm, her credit, and her tongue:
(*The Parish Register, II*)
(しかし農園と信用とおしゃべりはそのまま続けた。)

....admired, if not approved;
praised, if not honour'd; fear'd if not beloved;
(*ibid.*)

(賛成されなくとも敬服され、たたえられなくとも感心され、慕われなくとも恐れられた。)

のような同語重疊、

A Child of Same, — stern Justice adds, of Sin,
(*The Parish Register, I*)
(おごそかな正義が、不名誉の子供に、さらに罪のという語を付け加える。)

19 “From Pope, Crabbe learnt how to achieve variety and flexibility in his use of the couplet. Especially did he acquire the trick of moving the position of the caesura to break up the monotony of the line and to approximate to the rhythm of natural speed,” R. L. Brett: *George Crabbe* (Writers and Their Works, no. 75)

The louder Scandal walk'd the Village-green:

(ibid.)

(声の大きい醜聞が村の共有緑地を歩き回った。)

この種の擬人法、——これら詩的語法のすべては、言葉による幾何学模様の趣きを持つが、このほかにも18世紀の英詩で極端なまでに形式化された修辞法がひしめいて、クラップの詩を形づくっている。

1812年にスミスという兄弟が、当代の人気ある詩人たちの愉快なパロディーを作って出版し、クラップもその詩風の退屈さと陳腐さをやり玉にあげられた。スミスはその註の中で、

So, to amend it, I was told to go

And seek the firm of Clutterbuck and Co.;

(*Tales of the Hall*)

(そこで、それを訂正するために、クラターバック商会を探してこいといわれた。)

という詩行を例にあげて、クラップの無体裁な行末韻を揶揄した²⁰。こうしてクラップは、同時代の人たちからも詩の技巧の無頓着さを問題にされたが、19世紀以降も「技法が今日の芸術家に要求される第一の資質であり、クラップの技法にはひどい欠陥が多すぎる」²¹として、この種の批判は後々までも受けつがれた²²。

クラップが文体に意を用いること少なく、型にはまった韻文を書いたことは否定できないにしても、それにはそれなりの理由もあったし、また詩人自身にしてみれば、ずいぶんと努力もしたらしいふしがある。「わたしはいくつかの事情で旅行するわけにいきません。わたしは最新のそして(まず間違いなく)わたしの最後の作品を、印刷にまわす準備ができていないのです。原稿の修正にどうしてよいか分からないほど時間がかかります。……正直のところ、韻文を書いて読んで直すのに、もううんざりしました」²³ というチャーター夫人にあてた晩年の手紙に残っている。やはり作品の推こうには終生意を用いたものと思われる。ここにいう作品とは、1819年の『屋敷の物語』のことで、事実これがクラップの生前最後の出版となったが、その中においてさえ、金持ちの妾となった女が、昔の恋人に会って歌う

My Damon was the first to wake

The gentle flame that cannot die;

My Damon is the last to take

The faithful bosom's softest sigh;

The life between is nothing worth,

O! cast it from thy thought away;

Think of the day that gave it birth,

And this its sweet returning day.

(*Tales of the Hall*)

(わたしのディモンは、消すことのできぬ

静かな焰をはじめて燃え上らせた人。

わたしのディモンは、かわらぬ胸の

やさしいため息を最後にうばう人。

その間の人生は生きる値打ちもなかった。

おお、それをお前の心から捨て去るがよい。

そして初恋の生れたあの日と、

それが戻った甘いこの日を思うがよい。)

こんな隔行に押韻した8音節詩行を、物語の途中にさしはさむ叙情的な試みも忘れなかった。またクラップの詩行を冗漫とみればそれまでのことだが、教区一番の女丈夫に死期の近づいたことを述べるくだりで、

When, as the busy days of Spring drew near,

That call'd for all the forecast of the year;

When lively hope the rising crops survey'd,

And April promised what September paid;

When stray'd her lambs where gorse and

greenweed grow;

When rose her grass in richer vales below;

When pleas'd she look'd on all the smiling land,

And viewed the hinds, who wrought at her

command;

(Poultry in groups still follow'd where she

went;)

Then dread o'ercame her,—that her days were

spent.

(*The Parish Register*, I)

(春のあわたたしい日が近づいて、一年のあらゆる予

20 J. & H. Smith: *Rejected Addresses*, London, 1812.

21 "Technique is the first quality demanded of an artist in our day, and Crabbe's technique is too often defective in the extreme." C. Ainger: *Crabbe* (English Men of Letters), New York, 1903.

22 G. Saintsbury: *Essays in English Literature, 1780 ~ 1860*, London, 1895 あるいは L. Stephen: *Crabbe*, London, 1904 など。

23 "My journey is prevented by several Circumstances; I cannot yet prepare my new, and (most assuredly), my last Work for the Press: the Correction takes more Time than I know how to spare: ... to say the Truth I am weary of reading, writing, and correcting Verses." O. Sigworth: *Nature's Sternest Painter*.

想を呼び起こすとき、新鮮な希望が萌え出る作物を見渡し、4月が9月の獲り入れを約束するとき、はりえにしだやひとつばえにしだの中を、彼女の羊たちがさまようとき、下方のゆたかな谷間に彼女の草が生い茂るとき、楽しい心ではほえむ大地をながめ、彼女の云いつけで働く作男を見るとき、(雞たちは群をなして、いまでも彼女に附いてまわるが) そのとき、恐れが彼女を襲った——自分の人生は終わったという恐れが。)

こんな具合に生き生きとした春の絳景が、同じ文型でいくつも続くあとだからこそ、女傑の死期をさるといふ最後の1行が、迫力をもって読者に伝わるのではあるまいか。くどく感じられる細かい叙述の反復も、結語を効果的に導くための半ば意図的な語り口に通じていたと想像される。H. グリアソンは「クラップの文体も韻律も、感情と主題に適した外観をとって、必ずしも文体が平板で、韻律が単調とはいえない。」²⁴と弁護している。

グリアソンは同じ箇所「クラップにとって事実上即したそっけない文体——詩人自身のいう雰囲気のない詩——は、どんな装飾的な文体、盛り上げる韻律よりも彼に適していた」²⁵という。また H. チャイルドも「クラップがほとんどカプレットだけに固執したことは、たしかに賢明であった。人物の細かい描写や平たんな物語の展開には、それ以上に適した詩型はあり得ない」²⁶という。つまりクラップが用いた表現上の手段は、その内容を表わす必要から、おのずと選ばれたものであった。科学者の自然観察のように冷静で微細な描写と、田舎町での人と風俗を描いて人生の実相を再現する物語というクラップの詩の本質が、あの詩型と用語と韻律とを選択させたのにほかならなかった。

したがってクラップのリアリズムが、その時代の社会的、文化的土壌の一面を表わしていたのと同じ意味において、クラップの採った表現の様式も、またその時代の知的風土と密接に関連していた。すでにしてカプレッ

トがオーガスタンの詩人たちの詩型の上に君臨したことで、この時期の自然概念のひとつの表われと考えることができる。存在は物理的な原理に支配された秩序ある統一体をなすとする啓蒙期の自然観が、理神論の興隆や科学研究の進歩や、幾何学的整然さをもつ庭園術の流行や、安定した階級組織等の諸現象の根柢を支えた。10音節詩行2つを単位として規則正しく押韻し、くっきりとした対照語法を基盤として、行末休止を正格とするヒロイック・カプレットが、そのころの人の存在全体にまたがる秩序と平衡の感覚に、美しく適合したことは想像にかたくない。「押韻されたカプレットの基本は対照法であり、対照法はオーガスタン時代の多くの文学者にとって、自然の表現様式であった。ポープにとってカプレットは、事物の全組織の中における人間の二面的な地位を述べるにもっとも適した韻律であった」²⁷であり、クラップが人生の表裏両面を機械的な正密さで描出するために用いたあの表現の様式は、後の時代の読者からどのように見えようとも、それが書かれた時代特有の意味に裏打ちされていた。

これまでのところ、クラップの詩の特色のうち、主として18世紀の伝統に沿う面を考察の対象としたが、実際はこれらの伝統は、18世紀が終末に近づくにつれて、徐々にイギリスの文学界から消滅しつつあった。クラップが『村』を書いて文壇に登場したのは1783年であり、それ以後の主要な作品は、すべて19世紀に入ってから出版された。だからクラップの作品は、18世紀から19世紀へ移る一過程を具象化していた。いかなる作品も、それが書かれた時点にあっては、伝統の末端と革新の先端との接点に立つ。クラップは18世紀の伝統に従ったのと同じ程度に、その時代の新らしさをも具現していた。そして19世紀的な面への考察を以下に続く章(その二)の中で行ないたいと思う。

- 24 "Crabbe's style and verse are the fitting garb of his feeling and themes, nor his style always flat, his verse always monotonous." H. Greason: *A Critical History of English Poetry*, London, 1950.
- 25 "For Crabbe's purpose the matter-of-fact style,—poetry without an atmosphere, as he himself calls it—... was better suited than a more decorative style, a more swelling verse." *ibid*.
- 26 "Crabbe was undoubtedly wise to keep almost exclusively to his couplets. No metre could be better suited to his close sketches of character or to the level development of his tales." H. Child: *George Crabbe* (The Cambridge History of English Literature XI), London, 1932.
- 27 "The basis of the rhymed couplet is antithesis, and antithesis for many Augustan writers was a natural mode of expression. For Pope the couplet was the most appropriate measure in which to state man's equivocal position in the scheme of things:." R. L. Brett: *George Crabbe* (Writers and Their Work, no. 75).